HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道歯学会の34年をふりかえって
Author(s)	鈴木, 邦明
Citation	北海道歯学雑誌, 34(1), 1-1
Issue Date	2013-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53318
Type	journal article
File Information	01-34 1kantougen.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道歯学会の34年をふりかえって

北海道歯学会・会長
鈴　木　邦　明

北海道歯学会は広く北海道の方々に役立つ学会を作ろうという趣旨のもとに，本学部在職者および本学部関係者はもちろんのこと，道内の他大学の関係者ならびに一般の歯科医師の方々にも広く参加を呼びかけて，1979年７月13日に発足した．発足時の入会者数は216名であった．歯科医師不足という状況を背景に，1967年に日本の７番目の国公立大学歯学部として北海道大学に歯学部が設立され，１期生が卒業して６年目，1974年に大学院歯学研究科が設置されてから５年目にあたる．講座・診療科の新設が相次ぎ，教職員の入れ替わりも激しく，発展途上の時代であったが，歯科界全体にもあふれるエネルギーが満ちており，学部学生の定員の倍増，建物の新設など勢いのある状況での北海道歯学会の設立であった．

当時，私は北大歯学部を卒業して大学院の１年生であった．基礎系・臨床系を問わず全国レベルの専門学会もある中で，あえて北海道に歯学会を設ける意義を問題視する意見もあったというが，北大を中心として北海道の歯科医学を発展させていこうという，高い志のもとで本学会の設立が計画されたのだと思う．歯学会は，５月の総会ならびに学術集会と11月の学術集会を年２回開催する定期例会とし，その他に，随時，各講座等が主催して本学会が承認する形で，一般例会を開催できることとしてスタートした．

1980年12月には北海道歯学雑誌の第１巻１号が創刊されたが，歯学雑誌の刊行に関しても反対意見も多いと聞いていた．専門分野の学術雑誌が多数存在する中で刊行しても価値の低い学会誌となるのではないかという心配，編集担当業務及び経済的な負担を危ぶむ声もあるなかで北海道歯学雑誌の刊行は始まった．1984年度までの５年間は年１号の発刊であり，各講座の業績が掲載されたり，歯学研究科・歯学部内の活動報告的な色彩も強かった．1985年度からは年２号の発刊となり，歴代の編集長・編集委員のご努力もあり，少しずつ充実を重ねながら現在に至っている．1992年度から，査読制度を充実させるとともに，６月15日と12月15日に確実に発刊されるようになり，学位論文の投稿雑誌としての重要性が高まった．また，1996年度の第17巻１号から従来のＢ５版からＡ４版に変え，デザインも公募により一新した．学位論文以外の原著も増加し，総説，特集記事，最新の歯学を紹介する記事も掲載して，幅広い情報を会員に提供している．また昨年からは北海道歯学雑誌の記事がそのまま北海道大学のHUSCUPで読めるようになったことから，会員以外にもかなり広く読まれている．一方創刊以来続く，北海道歯学会の講演抄録と北海道歯学会の記事及び理事会・評議員会・総会の記事も掲載されて，北海道歯学会の機関誌としての機能も維持されている．その後，学位論文の投稿と研究業績のレベルを上げるという二つの目的を両立できるように，３月と９月の年２回の発行体制とした．

北海道歯学会は着実に学会としての活動実績を重ねて1989年には会員数が650名を超し，1990年９月11日に学術団体として日本学術会議に登録された．その後，会員数には大きな変動はなくほぼ一定で推移し現在の会員数は620名である．定期の例会は，1990年度から９月例会と２月例会を追加し，年４回となった．各定期例会の役割は，総会及び学術大会では様々な分野の演者による特別講演と学位申請予定者及び一般講演，９月例会は留学から帰国した研究者の講演会，秋季学術大会は学位申請予定者の講演会，２月例会は新任の教授・准教授の講演会として企画することが多くなった．また，大学院重点化以降の大学院生数の増加に伴う学位論文発表数の急増により，2000年度以降は秋季学術大会を金曜日と土曜日の２日にわたって開催している．2003年度には，若い研究者を盛り立てることを目的に北海道歯学会賞を設立し，歯学会総会において受賞者の記念講演を行っている．受賞者には副賞を贈るとともに総説を北海道歯学雑誌に掲載してもらい，一層の研究キャリアの向上につながるようにしている．

昔からの経緯を知るものとしては，北海道歯学会，北海道歯学雑誌とも，時代の変遷とともにその役割も変化させながら現在に至っているように思われ，歴代の関係者・編集者のご努力に敬意を払いたい．今後は，設立時の理念でもあった，北海道の歯科界に寄与し大学外の会員にとっても魅力のある学会としての体制作りが課題と考えている．